



## 話題の本棚

高松夕佳著、京都大学総合研究推進本部監『京大理系の科学入門「すごい研究」はこうして生まれる』  
ドストエフスキー著、米川正夫訳『ドストエフスキー短編集Ⅰ』

(特集1)綴葉×ルネ 創刊50周年記念座談会

(特集2)読者からのリクエスト書評

新刊コーナー／新書コーナー

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seikyo/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/)



univ. 京大生協  
CO-OP 綴葉編集委員会

# 京大の知の世界に迫る——「自由」を照らし出せ

## 京大理系の科学入門

「すごい研究」はこうして生まれる

高松夕佳著

京都大学総合研究推進本部監 講談社



この夏、『綴葉』は四五〇号を迎えました。記念すべき本号の冒頭を飾るのは、新しく始まった「京大×ブルーバックス」シリーズ。京大の知の世界の現在地を照らし出す二冊をお届けします！

### ■数多のノーベル賞を生んだ豊かな知の土壌

このコラボの皮切りとなる本書は、《京都に住み始めてまもない文系の筆者が「京大理系」の迷宮に分け入り、その本質に触れようとする試み》と掲げられている。二〇名近い京大の理系研究者へのインタビュー集と言ってもいいだろう。iPS細胞研究所や基礎物理研究所といった看板所はもちろん、野生動物研究センターや防災研究所といった耳馴染みのない組織も登場し、理論に実験、フィールドワークと多岐にわたる研究の世界を垣間見ることができると。なんと、なんとも読み進められるのが本書の魅力だろう。

筆者がそれぞれの研究室を訪れる場面から始まり、研究者が熱量たっぷりに自らの研究の面白さや舞台裏を語ります。おまけに学生たちも登場するのだから、なんともにぎやかな印象だ。

京大に入学して早九年になる評者にとっても本書は刺激的だった。（院生も含めて）学問に人生を賭す者は皆一國一城の主であり、隣

の研究室の扉を開けばそこには全く違う世界が広がっている。だからこそ、京大を目指す高校生はもちろん、すでに京大生であるあなたにも本書は一読の価値がある。「自由の学風」の現場に目指されているもの——そのエネルギーは読者にも届くはずだ。

### ■学問の「自由」が揺らぐ今こそ、私たちの手に紙のノイズを

併せて紹介したいのが、同じくこの春に創刊された『京大マガジン』だ。《学がごとくに取っ掛かれた者たちの、紙の上の実験室でありたい》と始まる創刊の辞は美しく、編集長・藤原辰史の学問への覚悟、そして現在の研究状況への危惧が現れている。第0号のテーマは「失敗」。知とは、これまで積み重ねられてきた数多の失敗の痕跡の呼び名でもある。研究者らの対談やインタビュー、エッセイからなる本誌はいずれも読み応え満載だ。



印象的だったのは、藤原辰史と三宅香帆の対談のなかの「紙媒体の力」という一節。個別最適解を求め（させられ）る今の時代だからこそ、かえってノイズや偶然性こそ他者に手渡せる雑誌には意味があるのではないかと。《学問はだれかの所有物ではない。……なにかを学んだ者は、またそれをだれかに受けわたさなければならぬ》——そこには知の共同性が立ち上がる可能性が拓かれている。

『綴葉』もまた、本という知の結晶を繋ぎ、届けていく雑誌です。ここで取り上げた二冊は特集①の綴葉×ルネ座談会にも登場します。どうぞお楽しみください！

（浅煎り）  
（二九六頁 税込一三三〇円 4月刊）

## 涙と笑い、幻、ペテルブルクの街並み、小さな悲喜劇

### ドストエフスキー

### 短編集Ⅰ

ドストエフスキー著

米川正夫訳

中公文庫



「ほくは間もなく賞与をもらうからね、ナスチエンカ……」  
「じゃ、もう明日からあなたはうちの間借り人ね」  
「そっだ、ほくたちはいっしょに《セヴィリヤの理髪師》を聞きに行こうね、今度また近いうちにかかるから」

往来で偶然出逢った男女の、叶うこと能わぬ刹那の契り。孤独な空想家の青年と、恋人に棄てられた娘は二人、まるで無邪気な子供のように、手を取り合って儚い約束を交わし合いながら、白夜のペテルブルクをそぞろ歩く。一つところに長く立ちどまってしゃべり込んでいるかと思うと、またもやたらに歩き廻って、とんでもないところへ出てしまう。こうして再び笑い、再び涙……。この瞬間だけは、青春は、真実だ。たとえそれが、元恋人の登場で瞬く間に奪い去られる、虚しい幻想にすぎないとしても。明けの訪れとともに溶け去ってしまう、一夜かぎりの夢にすぎないとしても。「感傷的ロマン」という副題の通り、『白夜』はたしかに青臭いほどに感傷的だ。だが、それがなんだというのだろう。こうして、空想家はさながら灰の中を掻き廻すように、自分の古い空想をさぐって、その灰の中にほんのかけらほどの火の粉でもさがし出し、それを丹念に吹き起こして、(…) いっさいのものを復活させようとする――

そんな空想家の語りには、たしかに、地下生活者の孤独な憂愁を予感させるものがある。そして彼らを取り巻くのは、極端に幻想的なものと、熱烈な理想主義的なものと、色褪せた散文的な日常茶飯事的なものとの混合である、蜜気穢めいたペテルブルクの街――後にラスコリニコフたちの眼前に拡がる、あのペテルブルクだ。

一方、虐げられ、社会の片隅でひっそりと生きる「小さな人間」を描いた『弱い心』は、ゴーゴリ『外套』の変奏だ。病的なまでの感動気質であるヴァーシヤは、親友にいわれれば「この世にありとあらゆる敵同士が、不意になんのきつかけもなく、仲直りすればいい」と望む善良な小役人。ここにムイシュキン(『白痴』)の面影を見て取れるが、ヴァーシヤは幸福に圧倒され震撼されて、自分はその幸福に値しないものだと思い込み、それを証明する口実をさがし出した末に自分を追いつめて発狂してしまう。ペテルブルクという大都市に絡めとられた、貧しい善人の悲劇である。

ドストエフスキーといえば長編作品の存在感が大きく、短編集の邦訳刊行もあり多くない。そのなかで、流麗な米川訳を全集から再録(前期作品をⅠ、後期作品をⅡに収録)した本書が刊行されたことの意味は大きい。そこに収められたのは、長編作品で展開された群像の、雛型ともいえる人間たちの小さな悲喜劇。ベルジャーエフが論じるような(『15頁』)統合的な精神世界へ分け入るのはまた少し趣を異にするが、短編という形式だからこそ、作家ドストエフスキーの手づきを具に観察することができるだろう。

(猫足)

(四八一頁 税込一三三〇円 5月刊)

## 特集(1) 綴葉×ルネ 創刊50周年記念座談会

学生運動の熱気冷めやらぬ 1975 年。京大から 1 冊の書評誌が誕生しました。

その名も『綴葉』——《本を読むということは、人間社会の重要な特質である。それは、ひとりの人間が体験するわずかな経験だけではなく、人間社会が経験してきた蓄積を入手すること、これが読書の本質である》という言葉が、創刊号には刻まれています。



そして本誌は昨年度で創刊 50 周年、本号で 450 号を迎えます。今回は特別企画として、我々京大生の読書生活を支えるルネのベテランスタッフ 2 名をお迎えした綴葉編集委員との座談会をお届けします！

ルネをめぐる歴史、ひとつのコーナーに込められた想い、編集委員の研究がクロスオーバーする瞬間、半世紀のなかの不易流行をぜひお楽しみください。(浅煎り)

——本日はよろしくお願ひします。さて、スタッフのお二人はいつからルネでご勤務されているのでしょうか？

石橋：私は雑誌を担当して一五年、文庫・新書を担当して五年になります。その頃はまだ雑誌に勢いがありましたし、同じものをみんなで共有するという雰囲気がありました。ただ最近では『ダ・ヴィンチ』然り、悲しくなるくらい雑誌の休刊が多いんです。仕方がないと思いつつ一抹の寂しさはありますね。

山下：僕は動め始めて三〇年近く。当時は電子書籍なんて言葉もないし、PC は起動に数分かかる時代です。ノーベル賞を獲られた益川敏英先生も、クラシックのCD が好きでよく買いにきてくださって。

ばや：CD も売っていたんですね。それとルネが時計台の地下にあったときのことも伺いたいです。当時は「ルネ」という名前ですらなかったと。噂では背中と背中が密着するほど通路が狭くて、今のルネとは異なるカオスでアングラな雰囲気漂っていたとか……

山下：「ルネ」という名前は、今の場所に移転するときに学生公募をして決まりました。それ以前、中央キャンパスにあった頃は売場面積も今よりずっと小さかったんです。時計台の下には靴屋や写真屋が入っていて、床屋の向かいに本屋がありました。そこに広がっ

ていたのは阿片窟のような濃密な空間で(笑)、その空間に足を踏み入れて本を選ぶというあの時代のほうが五感を通じて本と接することができたように思います。ワクワク度合いも全然違いますよね。

ばや：僕は古本屋によく行くのですが、綺麗に整頓された店よりも、雑然と本が積み重なっている汚い古本屋のほうが好きなんです。そこで古本を漁っていると、指先は黒ずむし咳は出るしで散々なのですが、空間のオーラがそうさせるのか、「いい本があるんじゃないか」と思えるんですよね。

《京大生を支えるルネという空間》

——京大のなかの書店として、普段から意識されている点がありますか？

石橋：雑誌だと青土社の『現代思想』、サイエンス社の『数理科学』は絶対に切らさないように力を入れています。文庫・新書だと三宅香帆さん、朝井リョウさん、東畑開人さんは人気ですし、國分功一郎さんの『暇と退屈の倫理学』も売れ続けていますね。

あと、他の書店と違うのは、ルネには毎年新入生が来てくれること。森見登美彦さんはもちろん、今なら宮島未奈さんの『成瀬シリーズ』も意識的に置くようにしています。ルネが読書を始めるきっかけになってほしいし、

「ここにきたらなんかある」と思っしてほしいです。



ばや・ちなみにこの前まで、毎年恒例の「筑摩書房全点一五〇〇F Fフェア」が開催されていましたが、あそこに並んでいるちくま学芸文庫やちくま文庫は、石橋さんが全部一冊一冊選んでいるんですよ？

石橋…そうなんです。あの作業は苦しいんですけど（笑）。筑摩書房の方によると、ほかの書店ではちくま学芸文庫よりちくま文庫のほうが売れるらしいんです。けどうちではちくま学芸文庫のほうが売れている。そこはさすが京大やなと思いました。

あと印象に残ったことと言えば、東日本大震災の後、耐震補強の関係で本棚の数と高さを減らしたことがあったんですよ。そしたら「京都大学の書店でこれは何事か！」と先生や学生の方からクレームがたくさん入って。私たちにとってはそれがすごく嬉しかったです。現場でもこれは減らしすぎやろっていう声があったのに、上に言ってもなかなか状況は変わらない。そんなときに組合員さんから改善の要望があったのでありがたかったです。それだけルネに期待してもらえているんだなっていう嬉しさもありました。

### 《コーナーに込める意味》

——最近、京大的作家コーナーのすぐ横に、学生が制作したZINEや同人誌を置くコーナーができましたね。これはどういった経緯で作られたのでしょうか。

石橋…『アレ』という同人誌が文学フリマに出店されたときの隣のブースが京大の文芸サークルだったんです。そこから縁が繋がって始まりました。そこで学生さんに募集をかけてみたところ、ミス研さんやSF研さん、京大短歌さんが連絡をくださり、輪が広がっていったという流れです。

ばや…もう棚がパンパンですよ（笑）。

石橋…そうなんです。悩ましいくらい（笑）。

このコーナーを設けて二年くらいになるのですが、ファッションから淡水生物まで、いろんなジャンルのサークル誌が集まってきました。とても嬉しいです。



ばや…ほかの大学生協ではなかなか見ない試みですよ。商業誌の規格には収まり切らない自由なエネルギーが感じられます。

倉井…このほかにルネとして力を入れてきたコーナーはありましたか？

山下…コロナの特集コーナーですね。朝日新

聞の藤原辰史先生の記事とも重なりますが、コロナになった当初は「日常に戻る」という表現をよく見かけましたよね。その日常を今まで変えようとしていたはずなのに、非常時においてはそれが受け入れるべきもの、そこに戻るべきものになってしまった。けど、それでいいのだろうか？ と。大切なのは、歴史を学んだうえでどのような社会を目指すのかということだと思っんです。

だからこそコロナが収束した後も、『現代思想 二〇二〇年九月臨時増刊号』の総特集「コロナ時代を生きるための六〇冊」を参考にしてください。長くコーナーを置いていたんです。売り上げは別にして、少しでも長く目に触れられるものであってほしいと思っています。サブリミナル的に届いてほしいなと。倉井…なるほど。一過性で終わらせないことの意味ですよ。では、今のルネでイチオシのコーナーはありますか。

山下…僕からは『京大マガジン 0号』「失敗」です。「自由と自主」の思想を体現することを目指した「紙上の実験室」をテーマにしたこの本が、京大から発信されていることの意味を感じます。「読書離れ」と言うとき、そこでは小説やエンタメ系の本を前提として語られているところがあると思うんですけど、そうした本と学術書や専門書を雑駁に混ぜて

語ることは普通でできないと思うんです。

でもだからこそ、京大という場では、その面白さの部分と知の部分の融合させて本当の意味での本の世界を作り出していくことが重要になってくるんだと思います。その意味でも『京大マガジン』がこれからも続いて、その理念が中心的な役割を果たしてくれば嬉しいなと思います。

石橋…私からは「京大×講談社ブルーバックス」のコラボ企画です。八月末までブルーバックス全点フェアを行うので、普段あまり理系の本は読まないという方にも手に取ってもらいたいです。

ばや…なかなか理系本エリアには立ち入らないのですが、ブルーバックスはいつも気になる存在です。

石橋…理系の専門書以外にも『山に登る前に読む本』や『サッカー上達の科学』など面白い切り口の本もたくさんあるので、ぜひ理系本エリアにも足を踏み入れて、実際に手に取っていただけると嬉しいですね。

### 《編集委員の研究分野と「本」》

——ここまで近年の本の「変化」に光を当ててきましたが、ここからは「不易」の面にも光を当てていきたいと思います。それぞれ専門性をもって研究している院生が集まってい

るのが綴葉ですが、編集委員の「本」と「研究」のつながりを見てみたいと思います。

ばや…僕は普段、二〇世紀のドイツ思想史、とくにハンナ・アーレントという思想家の研究をしています。数年前、修士論文をもとに『世界への信頼と希望、そして愛』という本を出したのですが、そこでの重要なテーマは「物」でした。人間にとって物とは何か。人間の寿命を超えて存続する物は、人間にとっ

ていかなる意義を持つのか。そうしたことをあの本では書きました。そして僕の「物」への関心はその後、「古本」へと向かいます。

古本はまさに個人の一生を超えてこの世界に残り続けた物です。僕は気づけば古本オタクになり、ひたすら五〇年前、一〇〇年前の詩集や同人誌を収集するようになりました。

倉井…私は、アフリカの北東にあるソマリヤという国の公用語であるソマリ語の出版物の研究をしています。一九六九年に政権を奪取した革命評議会が七年『綴葉』創刊の三年前！に、それまで文字が定まっていなかったソマリ語を公用語化したことで、ソマリ語の出版物が急速に増大しました。

ただそれも長続きせず、九一年には内戦が始まって政権が崩壊してしまいます(↓高野秀行「恐るソマリヤ」。内戦というラディカルな転換はソマリ語の出版にどんな影響を与

えたのか。それが知りたくて研究をしています。

ばや…めっちゃくちゃ面白いじゃないですか。

倉井…内戦前には革命政権が知識人の監視や出版物の検閲をしていたのですが、内戦が始まったことで皮肉にも言論の自由が認められるようになりました。国立印刷局から印刷機をかってはらってきて本を出していたとか(笑)。そんななか、社会改革を唱える思想家も九〇年代末から現れるようになりました。

ただ、たった三〇年前の話なのに、そうした人たちは既にほとんど名前が残っていないし、僕自身、史料が見つかるまでまったく知らなかった。同じソマリ語で書いているとしても、今の若い世代とは断絶がある。

それは、公用語になるまで、ソマリヤ社会では自分たちの言語でものを書くということが一般的でなかったということも大きいと思います。しかし、そんな状況でも細々と人はものを書き続けてきた。

ばや…幾多の困難がありながらも、なんとか物が残ったからこそ、倉井さんはそれを知ることができたんですね。

山下…内戦によってソマリヤの政治に断絶が起きた、ということでしょうか。そこから新



たに本の世界が立ち上ってきた。

倉井：そうですね。ソマリアには出版取次がなく、今でも、印刷所、出版社、書店が一体化した同人誌的な流通形態が一般的です。今でこそ立派な装丁本が出版できるようになりましたが、当時はガリ版印刷で、一〇〇ペーシにも満たないホッチキス留めの小冊子で、知識人の言論活動がおこなわれていました。

《本を書くこと、読むことの原動力》

——編集委員の研究が誌面で明かされたのは初めてかもしれません（笑）。ばやさんはここまでのお話を聞いていかがですか？

ばや：疑問に思うのは、人はなぜそこまでして本を作ろうとするんだろう、印刷機を奪ってまで本を作ろうとする原動力はどこからやってくるんだろう、ということですね。日本の歴史を振り返っても、一九二〇～三〇年代は無数の同人誌が作られましたし、六〇～七〇年代も学生運動の高まりのなかで多くのピラが刷られました。そして現在も多くの若者がZINEを自主的に制作しています。もちろん変化や断絶はありますが、かたちあるものを作って何かを表現したいという欲求はいつの時代も途絶えないのだと感じます。

山下：実存が脅かされている状況のほうが、自分の思想や感情を外に出したいという表現

欲求が高まるのだと思います。本を出すという営みに限らず芸術全般が花開くのは、平和で均一な時代状況よりも、危機的で抑圧的な時代状況においてなのかなど。

ばや：危機の時代の救いとしてのZINEや同人誌、ということでしょうか。

石橋：コロナ禍のときは、本を書きたい人だけではなくて、本を読みたい人も多かったと思うんですね。危機のときに本を読んで、そこに何か答えのようなものを求めるということがあったんじゃないかなど。

——「書く」から「読む」というところにも話が及んできました。そもそも私たちはなぜ、本を読みたいと思うのでしょうか。

ばや：僕は最近「読む」というより「集める」ほうにシフトしているんですけど、そこで「じゃあなんで集めるんだろう？」と考えたら、その根底には僕がずっと抱えている「この世界のすべてを忘れたくない／忘れてはならない」という想いがあるんだと思います。古本を読むときも同じような想いが働いている気がします。つまり古本を読んでいるその瞬間だけは、作者であれ登場人物であれ、当時の人たちがよみがえるわけです。そうして僕は五〇年前、一〇〇年前の人びとを忘れないでいること、思い出すことができる。

山下：まったく同感です。やっぱり「人」と

「物」は切り離すことができません。そして本はとくにそれが顕著です。一人ひとりの人間の感情や人生がここまで詰まったものはないかなありません。人生のすべてをそこに込められるもの、それが本であって、そこに本の本質があると思うんです。本を読むことは人間の実存が詰まったものに触れるということだと思っんです。

——ただ本の内容の紹介だけで終わるのではなくて、その背後に広がる世界や想いまでを届けられる『綴葉』でありたいですね。最後に京大生にメッセージをお願いします。

石橋：若い学生さんにはとにかく、心身ともに健やかであってほしいです。それだけが願いです。一日に一五分でも三〇分でもひとりで静かに過ごせる時間があればいいなと思いますし、そのなかに本を読むという選択肢があれば書店員としては嬉しいですね。

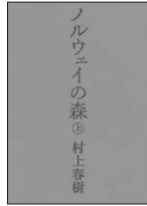
山下：僕も石橋さんと同じ思いです。今、学生さんはいろいろな抑圧を受けているわけですが、そうした閉じ込めや囲われの意識から解き放たれて、感覚が開かれる場所、緩められる場所としてのルネにしていきたいなと思っています。そういう場を作るために僕たちは頑張るので、皆さんにちょっとでもルネに足を運んでもらえたら嬉しいですね。

（司会：浅煎り 聞き手：ばや・倉井）

## ノルウェイの森

村上春樹著  
講談社文庫

はじめに、『ノルウェイの森』をリクエストしてくれた読者の方に感謝します。作品を読むのは二回目ですが、色々と発見がありました。全部は書けませんが、収まる限りで書いてみます。



改めて読んでみても、ワタナベくんはろくでもない主人公ですね。「やれやれ」が口癖の冷笑家で、学生運動を横目に、毎週相手をとっかえひっかえセックスしている。心を病んだ恋人の直子のことで想起するのは射精の感触だし、山奥の療養施設に直子を残しておいて、自分は東京で別の女性に惹かれている。はじめて『ノルウェイ』を読んだのは大学一年の頃だったと思いますが、当時はワタナベくんのドライさというか、薄情さみたいなものに憤っていた覚えがあります。

でも、五年経って読み返すと、同じろくでもない今度には心揺さぶられてしまいました。これはなぜなのでしょうね。色々理由はあるんでしょうが、全体的に解像度が上がったんだと思います。エウリピデスの名前が出てきても、前は誰のこっちゃ分からなかった。でも今は、なぜ学生運動の只中でエウリピデスを勉強する必要があるのか、なんとなく分かる。「ち、ち、地図を作るんだ」というルームメイトの台詞にしても、それがライトモチーフだと気づけるようになって、見過ごしていた散歩や旅の場面が、違った色彩を帯びてくる。今までは、ただ狭い読み筋をなぞっていただけなのかもしれない。ともかく景色が全然違う。そういうわけでは今は、心にワタナベくんを容れるスペースがあるようなのです。

一度目で春樹アレルギーになった方も多いのではないのでしょうか。二回目の『ノルウェイ』、おすすめです。

(花瓶)

(上巻 304頁 税込792円)

## 特集(2)

読者からの  
リクエスト書評

『綴葉』読者の皆様。お待たせ致しました。お待たせしすぎたかもしれません。読者カードに「最近読んで面白かった本/今後取り上げて欲しい本」の欄がありましたね？ あれはなんのためにものだったか？ そう、このためだったのです。ついにみなさまの期待に応える日がやってまいりました。いざ、参りますよう！

(コーク)



## たゆたえども沈まず

原田マハ著  
幻冬社文庫

「たゆたえども沈まず」を標榜するパリで、ゴッホと弟テオ、日本美術の普及を目指す画商・林忠正、その助手・加納重吉の各々が奮闘する様子と彼らの親交を描く。かつて美術史学を専攻した作者だけあって史実とフィクションとが綿密に織り交ぜられている。本作はゴッホの生涯を追う形で進むが、物語はテオと架空の人物である重吉の視点から語られる。重吉の存在が、史実では親交の記録のないゴッホ兄弟と忠正とを有機的に結びつけ、兄を支え続けることへのテオの責任感と苦悩をより鮮明に描き出す。



画家として認められたい、兄の絵がきっと認められ画壇の新たな潮流になってほしい、異国の地で浮世絵を売りたい。彼らは、自分一人ではどうにもならない大いなる流れの中で、自分の理想を叶えようと自らを奮い立たせる。「たゆたいはしても、決して流されることなく、沈むこともない。」そんな舟のように。しかし、最終的にゴッホは自死の道を選び、テオもまたその半年後に病没する。彼らの舟は荒波の前に、大いなる画壇の前に、大破してしまったのだろうか。それでもテオの妻が忠正の助言を受けてゴッホの絵を後世に残そうと奔走したことで、彼の絵もまた、たゆたう舟となって沈むことなく現世に残る。

ゴッホの死因は拳銃自殺が有力であるが、拳銃に関する詳細は明らかになっていない。本作はその史実の余白をうまく突き、物語のひとつのオチを作る。史実と細やかに絡み合い現実味を帯びたフィクションは、時に事実よりも読者の合点を誘い魅了するものの、創作が事実を霞ませるようで評者は未だ歴史小説への態度を割り切りかねている。（時間）

(437頁 税込924円)

## ゲーテはすべてを言った

鈴木結生著  
朝日新聞出版

ゲーテ専門家がある日、聞いたことのないゲーテの格言と出会う。自らのゲーテ理解に奇妙に馴染むゆえに、頭にこびりついて離れない。出典を探したくなるのは自然な成り行きだろう。

しかし探せど探せど原典は見つからない……。なんとも小気味のいいプロット展開だ——既に小説になっていてもおかしくないくらいに。

『ゲーテはすべてを言った』を中程まで読み進めたころ、つまり、数多くの（西洋の）書物・格言への言及に少し食傷してきた頃に、珍しく日本の小説が顔を出す。主人公のゲーテ学者、博覧強記が、丸谷オーの「樹影譚」を読み始める（娘にもらったらしい）。

ここでああなるほど、と合点がいくわけだ。丸谷のこの短編は、樹の影になぜか惹かれてしまう小説家が、似たような話をどこかで読んだことあるな——たしかナボコフだったか——と思案し調べもするが一向に見つけられず、その挙句、自分でその話を書き始める、という話と、書かれたその話（入れ子の中身）が一緒になったメタフィクションだ。なるほど『ゲーテは』の大枠はこれを文学研究者に移したものとさえなくもない。

とすると、問題になってくるのは両者の違いだろう。丸谷の方は主人公も小説家だから創作したって構わないわけだが、学者ともなると、それはもう捏造ということになってしまう。『ゲーテは』の後半ではこれが焦点になる。言語表現におけるオリジナリティをめぐる虚実のせめぎ合いは最後、いかなる結果をもたすのか？ この辺りは実際に読んで確かめてもらうことにしよう。なかなか良く出来た小説だ。『樹影譚』も必ず併読すること。（コーク）

(200頁 税込1760円)



## ひとかけらの木片が教えてくれること 木材×科学×歴史

田鶴寿弥子著 淡交社

京都大学生存圏研究所には2万点を超える木材標本を保存管理する材鑑調査室という場所があることを、本書を読んで初めて知った。採集された標本は、植物解剖学、生化学、考古学、美術史など広い分野の研究に活用されるという。



本書は、木材解剖学を専門とする著者が仏像や寺院、仮面、茶室などに用いられている木材の樹種を同定してきた研究成果を、専門外の人に向けて紹介するものである。樹種の鑑定方法もちゃんと説明されている。色・重さ・香りも重要だが、光学顕微鏡を用いて観察できる組織構造の特徴が一番の判断材料で、広葉樹か針葉樹か、どんな科・属か、というように絞り込んでいくらしい。

著者が取り組んだ研究の1つは、20年以上解き明かせていない以下の問いだ。日本では7世紀ごろまで主に広葉樹（クスノキ）によって仏像が作られていたのが、8世紀になると針葉樹に変化した。この変化には、インドから中国に伝わった経典の中で、仏像彫刻の際に白檀の代用材になると説かれた「柏木」が関係しているのではないかな。そんな「柏木」はいったい何を指すのか……。

しかし、一筋縄ではいかない。なぜなら、樹種を常にうまく同定できるとは限らない上に新たな情報を得ても、森林資源の増減や地域による植生の違い、木材の流通の変化なども考慮しなければならないからだ。著者は言う。《歴史的建造物に使われている木材は、歴史や植生、用材観にまつわる情報を宿す、いわゆる「タイムカプセル」だといえます。》

そんな木材標本を蔵する材鑑調査室は毎年秋のオープンキャンパスにあわせて一般公開されるようなので、ぜひ訪れたい。(波見戸)

(232頁 税込1980円)

## フジタからはじまる猫の絵画史 ——藤田嗣治と洋画家たちの猫

府中市美術館編 筑摩書房

林忠正らが牽引したジャポニズムの時代、西洋の人々は日本の動物の絵の豊富さに驚いたという。日本画では動物も人間同様主役になり得る——子猫特有のあの毛の柔らかさが見事に表現された菱田春草の《黒猫》などは猫が可愛いことを伝えるための絵であろう！——が、キリスト教的世界観では人間に劣る存在である動物を描く際、何かしらの役割が必要とされた。だから西洋絵画に描かれる「象徴の動物」とは異なる「ふつうの動物」は非常に日本的なものと思われたようだ。



2025年に府中市美術館で開催された特別展の図録である本書は、猫の絵の歴史を辿る。その起点は藤田嗣治。肖像写真に猫が映る作家は多いが、藤田のように自画像にまで猫がいるのは珍しい。「私は猫を友達としている」と彼は言ったそうだが、その真意やいかに。

渡欧した藤田はそこで自分が日本人であることに個性を見出す。だが藤田はあえて「象徴の役割のある猫」を描いた。猫というモチーフによって西洋絵画の伝統を意識することで自身の技術に目を向けさせたのだ。その甲斐あって、「ベッド上の猫」を描いた《五人の裸婦》は彼の出世作に。後に彼の代名詞となる日本画由来の技法「乳白色の下地」そのものが狙い通り評価された。

存外窮屈な描き方に思える。だが藤田が描く猫は少しずつ変化していく。戦争画に取り組んだ時期、それにより戦争責任を問われた時期、そして日本を去ったあと。藤田の人生の転換期に猫はいつも立ち会った。「西洋の『芸術』の枠組みをこえようとする藤田の新天地」が見られるキャリア後半の作《猫の教室》にはただただ可愛い猫がいる。

(ひるね)

(168頁 税込3080円)

## 旅する木

星野道夫著  
文春文庫

短編集……というよりも、書簡集や日記集と言い表した方がしっくりくる。

著者は、生涯18年間アラスカに住み、そこでの自然や人々について撮影・執筆してきた人。本書もアラスカの話が多めではあるが、1993年から1995年の間の2年間に世界各国で著者が感じたことが書かれている。

自然と人間、そしてそこで営まれる生活を一つのまとまりとして捉えている著者。見た景色、あるいは経験に対しての自身の率直な感想と感動を、読者がその場で実際に見ているかのように感じさせる文体には、引き込まれるものがある。その場所でしかできない経験と、その時にしか出会えなかった人との繋がり、人生における偶発性とその美しさを感じる。一方で、近代化と伝統の狭間で苦しむ先住民や自然豊かな場所における環境問題など、自身がアラスカで生活するなかで直面する問題に加え、自分の目の前に居る他者が直面している問題について描く。

「初めての異国への旅はとても興味深いのに、アラスカへの想いがどんどん強くなってしまいうのです。」評者は、この一文に心を奪われた。海外生活に憧れを抱く人も多いし、実際に日本に居てはできない経験も多くできる。その一方で、もちろん楽しいことばかりではない。むしろ、苦しいことの方が多いのではないかとすら思う。しかし、アラスカに魅入られた者の運命。すべての苦悩すら受け入れ、ありとあらゆる場面でアラスカを思い出し、そこでのその気持ちを文字や写真で読者に伝える。

さいごに。過去数回おすすめしていた本は、旅好きの私に深く刺さった。おすすめいただいた方に深い感謝を込めて。(プラチ)  
(256頁 税込770円)



## 性なる仏教

大谷由香編  
勉誠社

評者は普段、研究の関係からイスラム教のことを勉強している。なので、曲がりなりにもイスラム教関連の知識は蓄えてきたが、恥ずかしながら仏教のことはほとんど何も知らなかった。

今回は読者リクエストに甘んじて仏教の勉強をしようと思い、そこで選んだのがこの『性なる仏教』である。タイトルに違わず、仏教の教義/ルールと、セクシュアリティ/ジェンダーとがいかに関わり合いながら発展してきたのかを論じた骨太な論集となっている。

紙幅の都合上、ここでは評者が面白く読んだ論稿を主に紹介したい(岸田悠里「転変する性」)。例えば、大乘仏教の經典である法華經には變成男子という思想が出てくる。これは、女性一般は穢れており、一旦男性になってからでないと成仏できないという思想である。とはいえそう簡単に性転換など起きるものだろうかと思いきや、中国で編纂された經典によると、女性から男性へ、男性から女性へ肉体的に性転換するという事例はよく語られている(それどころか、男性→女性に性転換した場合の教団内での処遇の規定さえある)。ただし大体の説話では、女性への性転換は欲心を起こした懲罰として語られている。つまり肉体的な性転換は社会的に認知されていた一方、それは凡俗ゆえに起こるのだとされたのである(詳しくは師茂樹『最澄と徳一』)。

評者としてはこれだけでも仏教の底深さを堪能できたが、他にも容姿端麗な出家者の話、女性だけが墮ちる地獄の話(最悪だ)、女人禁制の僧の話など、興味深い記述に尽きない。余談だが普段ローマ字とカタカナに馴れた眼に漢字を叩き込む訓練にもなり、一石二鳥の読書体験であった。

(倉井)  
(208頁 税込3080円)



# 新刊コーナー

## 京大1969

### 「自由の学風」の闘争史

松本卓也／福家崇洋／渡辺恭彦編  
青土社



「一九六八年から六九年にかけて、世界は叛乱の季節を迎えた。ほかでもない、学生運動の時代である。たとえば一九六九年の「東大闘争」。安田講堂では全共闘と機動隊の攻防戦が繰り広げられた。ゲバヘルを被り、ゲバ棒を持ち、手拭いマスクで顔を覆った学生たち——「安田講堂」の名は今でも、そうした叛乱の記憶と切り離すことができない。

しかし、「東大闘争」の記憶が受け継がれてきた一方で、「京大闘争」の記憶は受け継がれてきたと言えるのか。椅子や机をうず高く積み上げて、吉田南の正門に巨大なバリケードが作られたこと。時計台の頂上に何人もの学生がよじ登り、大きな旗を振っていたこと。西部講堂で「京大解放区バリケード祭」が開催され、討論会「数学と構造主義とバリケード——凝縮の0から創造のコントロンへ」が行なわれたこと。そうした光景は目に目に、

忘却の淵に追いやられているのではないか。

京大闘争は「政治的な大学闘争に留まらず、文化や学問のあり方そのものを問う運動へと深化した」。フェミニズム運動やエコロジイ運動へと至る「地下水脈」をなしていたこの闘争はそれゆえ、東大闘争の二番煎じとは決して言えない。にもかかわらず、そこに保たれてきたのは奇妙な沈黙である。本書はこの沈黙を破るために編まれた一冊にほかならない。

本書が今、刊行されたことの意味を考える。闘争の機運と反骨の精神が急速に失われている今、刊行されたことの意味を。（ばや）

みんなこうして連帯してきた  
失敗のなかで社会は変わっていく

ジェイク・ホール著  
安藤貴子訳 柏書房



街のプライド・バ  
レードに虹色の旗が  
ひるがえり、企業の  
ロゴが並ぶ。性的少  
数者の存在が公に祝われるまでには長い闘い  
があった。けれど本書が描くのはクィアだけ  
で勝ち取った権利の歴史ではない。教会を占  
拠する。パーティーを開いて保釈金を集める。

HIV治療薬を求めて街頭に立つ。クィア、非白人、労働者、障害者、移民、セックスワーカーらが、異なる闘いを結びつけてきた歴史だ。

こうした区分は、一人の生活のなかでも重なり合う。ある人はクィアであると同時に、移民として国境に阻まれ、労働者として搾取され、病や貧困にも苦しむ。差別や搾取もまた、切り離して存在してはいない。だから連帯とは、問題の外側から善意ある「アライ」として手を差し伸べることに止まらない。他者の闘いが自分の生活を成り立たせる仕組みともつながっていると知り、できることを持ち寄ることだ。当然、うまくはいかない。

内部で差別が起き、意見が割れ、要求が通らないまま組織が壊れる。それでも、その闘いは別の土地へ伝わってきた。失敗した闘いにも、人びとの出会いや言葉、戦い方が残る。本書が描くのは、探めて、壊れて、それでも何度も結び直されてきた連帯だ。

いまの日本でも、移民やトランスジェンダーが社会の問題であるかのように語られ、貧困は自己責任にされる。それぞれを「当事者の問題」として切り離せば、みな孤立する。正しい支援者になるのではなく、自分も問題の外にはいないと知り、異なる場所から肩を並べるための道筋を本書は示す。（たいやき）

（二八二頁 税込二六四〇円 8月刊）

# ドゥルーズを「活用」する！ 道具としての哲学

澤野雅樹著  
平凡社ライブラリー



ドゥルーズの著作を読んで、最初から彼の哲学が活用に堪えつると感じる者がいたのだろうか。連接する機械、幾重にも折り重なった髪、肛門からまばゆい光を発する裁判官……。どれも聞き馴れず、不吉で、生活圏からは隔絶したもののように響く。評者のように途中で本を投げ出してしまっ人は少なくはないはずだ。あるいは、「リズム」「器官なき身体」といった難解な概念を前に挫折した経験を持つ人も。じっさい、ドゥルーズには説明不足などところがある、としばしば言われる。なるほど、それではわれわれは、ドゥルーズの説明の余白を埋めてくれる入門書から着手するべきなのか？

いな、本書が提示するのは、全く逆の戦略だ。筆者の澤野は、その説明不足をむしろ極端なまでに推し進める。細かい思想的な文脈はさておいて、彼は具体例の叢林の中へとずんずん分け入ってゆくのだ。折り紙、ラーメン、イレギュラー・パウンド、お齒黒――。

この入門書に形而上学的なところは一切ない。あるのは全て卑近な、血の通った、しかしエキセントリックな具体例だ。手を変え品を変え提示される豊富な例は、ドゥルーズの概念が生きたれた経験の中でこそ輝くことを教えてくれる。

ドゥルーズはポップな哲学だと言われる。俄かに信じがたいが、澤野はわれわれが日常の中ですでに彼の哲学の端緒を掴んでいることを教えてくれる。理解する前に使ってみよう、それが本書のメッセージだ。

(花瓶)  
(二六八頁 税込一七六〇円 5月刊)

## 天文学の誕生 イスラーム文化がもたらしたもの

三村太郎著  
講談社学術文庫



「その昔／学者たちは幾何学を使い／初めて地球の大きさを知った」。十三世紀を舞台とした漫画『天幕のジャードウガル』（現在アニメ放映中）は天文学への言及から始まる。漫画の中では、ムスリムの学者一家の書庫にエウクレイデス（ユークリッ

ド）『原論』の写本が収められている。古代ギリシアの天文学が、イスラーム世界に輸入され発展したことは周知の事実であろう。では、その道筋はいかなるものであったのか。地動説に代表される西洋近代の天文学の発展といかに接続されるのか。本書はイスラーム文化圏の天文学史に関する、本邦初の概説書である。イスラーム世界の学者たちが天文学を発展させた文脈のなかで、本書で繰り返し言及されるのはプトレマイオス『アルマゲスト』である（この書名自体がアラビア語のラテン文字音写であることが、その来歴を物語っている）。プトレマイオスは、幾何学に基づいて天体の運動を精密にモデル化した。『アルマゲスト』がイスラーム世界で参照された理由は、アッバース朝宮廷において、異教徒との宗教的論議の影響で、直観に基づく弁証のみならず公理に基づく論証を重視する学者が登場したことにある。この流れの中で、天文学においても論証に基づく古代ギリシアの天文学が受容、改良されていく。

本書ではバビロニアやインドの数学の影響についても言及されている。天文学は様々な時代地域を経る。そして二五四三年には科学史における一大パラダイム――地動説がコペルニクス『天球回転論』で提唱された。（荒砥）

(一九二頁 税込二一〇〇円 3月刊)

# ショートショートなSF

日本SF作家クラブ編  
ハヤカワ文庫JA

二〇二六年、星新一

生誕百周年を記念して本作は刊行された。星新一の代名詞



として知られるショートショートだが、実はその定義は比較的緩やかで、多様な作品を包摂する。本書は、四百字詰め原稿用紙約二十枚以下の簡潔なアイデア・ストーリーと定義している。要は、短く、簡潔で、アイデアが光ればなんでもござれ。そのため、この本に収録されている五〇名の作家の書き下ろし作品は、宇宙、怪奇、言葉遊びと多彩である。

さて、読者の意表を突こうと、作家は既存の型からいかに逸脱するかを考える。しかし文字数と奇抜さのみを定義とするショートショートは、自ら寄りかかるとべき型を希薄にするという逆説を抱える。そのため作家が少し塩梅を間違えれば、文の結合や物語自体の破綻をも招き得る。評者には、この塩梅がショートショートの最も難しいところと思われるが、その中でも最も白眉だと感じた正しく奇妙な作品を二つ紹介しよう。

筒井康隆「楽天ボウル」。ボーリング場に

現れた巨軀で色白の轟惑的な女に徐々に主人公や周囲が魅了され、最後には皆が女に倣い、果てしなく続くレーンに狂ったように走り出すという物語。短さの中に深淵を覗かせる秀逸な一作である。文章は濃みないが、状況やプロットからそこはかとなく奇妙さが滲み出る。そして極めつけの最後の狂気。制約の緩さに甘え、奇抜さを演出しようとする文と文の繋がない作品もある中で、絶妙なバランスを保つこの作品は疑い深い読者にもショートショートの面白さを眼前に突き付ける。(時間) (四二九頁 税込二五八四円 6月刊)

## 鈍色幻視行 上

恩田陸著  
集英社文庫

恩田陸の灰色の描写は格別だ。『蜜蜂と遠雷』でコンテス・タントの二人は空を見上げる。そこには冬の雷が響いていた。



『麦の海に沈む果実』では少女が、灰色の空の下、フラットフォームに降り立った。あるときは変化の前触れを、あるときは先行きの

見えない不穏さを。恩田陸は様々な灰色をみせてきた。本作が纏うのもまた灰色。物語の舞台は鈍色の海に囲まれている。

謎多き小説家・飯合梓の『夜果つるところ』はいわくつき、いや、呪われている。映像化の度に人が死に、そして作者本人は行方不明だがこの呪われた作品に惹かれてしまう者たちがいる。最初の映画化時の助監督、二度目の映画化を試みたプロデューサー、作品の編集者、映画評論家等々『夜果つるところ』関係者が一堂に会する豪華客船が本作の舞台である。小説家の蛭谷梢は観察者としてそこに乗り込んだ。このいわくつきの作品を巡るドキュメンタリー執筆を名目に彼らの証言に立ち会うのだ。二週間超の船旅。動く密室は日常から遠ざかり、彼らの足元はゆれ続ける。皆顔を合わせては語り合う。この作品は本

当に呪われているのか、あのとき何があったのか、飯合梓は生きていくのか——そして鈍色の海を見つめる。波打つように反芻させた記憶は果たして最初と同じ形を保っているのか。

設定はまるで本格ミステリ。だが真実は一つ、とはならないようだ。評論家曰く「人生の中に真実はない……あるのは、虚構の中だけ」。本作が纏うのは、その虚構に身を捧げる者たちによる供養の鈍色だろうか。(ひるね)

(四〇八頁 税込二一〇〇円 6月刊)

## ドストエフスキーの世界観

ニコライ・ベルジャーエフ著  
斎藤栄治訳 白水ブックス

「ロシアは頭では理解できない」という有名な一節は、とりもなおさず、ドストエフスキーにおいてもいえる。矛盾と分裂に満ちたロシア社会とそこに生きる人間存在を直観的に捉えた精神世界は、抽象的な体系で理解しつづけるものではない。だから思想家ベルジャーエフは、作家の《動的な観念の世界に、信仰と統一的直観をもってとけこむという行きかたで彼に近づき、彼の根源的な世界観の密室に入り込》もうと試みるのだ。

ドストエフスキーは、なによりもまず、人間の自由を追究した作家である。隸属による善すらも、彼にとって唾棄すべきものであった。一方、自由は悪徳と罪の道へ、《ソドム的》情欲へと人間を導くものでもある。自由と隸属の相克はしたがって、愛と救済の問題——すなわち信仰の問題と不可分なのだ。カトリックや社会主義に対する作家の反感、そして『大審問官』というテキストもまた、かような連関のなかで深く理解されうる。評伝でも作品論でもない、作家の精神世界を現前せしめるドストエフスキー論の古典。(猫足)

(二七七頁 税込二七六〇円 6月刊)

## 人類学をつくり方

自分の日常から知識を編む  
橋爪太著作 光文社新書

この頃、複雑化する現代を捉えるレンズとして、他者と向き合い続けてきた文化・社会人類学の知見が注目されている。体系化された専門知を説明する一般書が続々と出版される中で、本書の立ち位置はそれらと一線を画す。本書の主題は、人類学者がどのように知識をつくるのか。フィールドへ調査に赴き、帰ってきて、新たな知を生み出す一連の実践を、著者自らの経験を追うように描く。

フィールドワークはうまくいかないもの。自ら進んで調査に乗り出したものの、言葉も解さない異質な存在として扱われ、目の前で起きることを意味も分からず悶々と観察し、記録する。調査から戻ると手元には断片的なデータがあるだけで、そこから新しい知識へとまとめなければならぬ。一人の学者が南太平洋・ソロモン諸島と日本を往復し、うんちながら民族誌を書く。それだけなのだが、彼の背景がメイキング映像のような臨場感で描かれることで、世界の見方を更新・拡張してきた人類学のやり方が見えてくる。風変わりだが惹きこまれる入門書。(たいやき)

(二八八頁 税込二二二〇円 3月刊)

## 宗教のアメリカ

藤本龍児著  
岩波新書

バラク・オバマやドナルド・トランプが大統領に就任した時、大統領就任宣誓は聖書に手を置いて行われた。これはもちろん法的に定められているわけではないが、過去に多くの大統領が同じようにしている。

この例にもあるように、アメリカ社会と宗教には深い関係性がある。しかしこの事実は今まで明確に事実と結びつけられて認識されてこなかった。本書では、歴史的な事象や文献を用いながら、アメリカ国家と宗教について捉え直すために描かれている。

大学における講義が基盤になっていることもあり、宗教とは何か、世俗化の影響、ピューリタンから始まったアメリカの歴史、公共空間における宗教の捉え方など、各章で先行研究と今までの考え方の枠組みが示される。すべての章に明確な結論があるわけではないが、現在のアメリカにおける宗教の立ち位置とその多様性がわかる本書は、非常に貴重と言える。まるで一章ごとか、学会のプレゼンテーションさながら丁寧な説明がなされているため、初学者にも読みやすい。(フナチ)

(三三八頁 税込二〇三四円 1月刊)

## 編集後記 拡大版

綴葉 450 号を刊行することができました！  
これもひとえに読者の皆さんのおかげです。  
これからも綴葉をお願いします！（荒砥）

最近、夜散歩をしているとよくゴキブリに出くわします。あいつら、人を避けようともしません。この頃の悩みです。（ばや）

最近はいくつ短期的な快楽を求めスワイプしがちですが、かえて書と対面したときの没入が格別であることに気がつきました。（たいやき）

それにしても暑すぎる。冷房を切って窓を開けることもなければ外にも出ない。この手に収まる本だけが外の空気を運んできます。（ひるね）

本が読まれるべき人に、読まれるべき時に届きますように。綴葉がこれからも愛に溢れる場所であり続けますように。（浅煎り）

蓮實重彦の『「ボヴァリー夫人」論』文庫化が最近一番嬉しいニュースかもしれません。みんなで読みましょう。（コーク）

毎回、「綴る葉」と打ってから、「る」を消しています。（猫足）

大学院入学後、なぜか自発的に小説を手にとらなくなりました。私自身も、綴葉で紹介された本を読んでいます。（プラチ）

最近ハンターハンターにドハマりして 32 巻まで一気に読みしてしまいました。最新第 39 巻はルネで絶賛発売中！（倉井）

長い夏休みがやってきましたね。綴葉が、読んでくださっている方の楽しみの一つになれたらと願っています。（時間）

図書館、喫茶店、近所のファミレス……本を読むのにベストな場所が見つかりません。夏の間は家の冷たい床の上かな。（波見戸）

人はパンのみにて生きるにあらず。人が本を読まなくとも、本の方が人へと迫ってくる。綴葉もそうした衝動であり続けたい。（花瓶）

### 当てよう！図書カード

百日紅の花が咲き始めました。子どもの頃はよくすべすべの幹を触って楽しんでたなあ。それでは問題！漫画『百日紅』の作者である杉浦日向子がデビューした漫画雑誌はどれでしょう。

1. ガロ
2. 週刊少年ジャンプ
3. COM
4. 漫画アクション

（波見戸）

《応募方法》答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先（<https://forms.gle/eV6cphoH2ZURK7>）から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。応募締め切りは9月15日です。



### 5月号の解答

5月号の問題の正解は、3. 豊中市でした。大阪府豊能郡豊中市に生まれた手塚治虫は、五歳のころ兵庫県の宝塚に転居し、上京までの十九年間で過ごしています。手塚治虫記念館も宝塚にあります。生まれは大阪だったようです。

図書カードの当選者は、unknownさん、どりさん、いぐあらしさん、たまごさんの4名です。当選おめでとうございます。（たいやき）